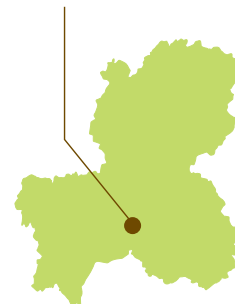


生駒牧場

※2018年3月現在

代表者名	生駒 一成	資本金	—
設立年	1951年	売上高	97百万円（2016年12月期）
事業内容	生産（生乳、肉牛）	経営規模	田 12.3ha、畑 1.3ha、生産施設 1,950㎡、経産牛 70頭、その他（未經産牛 30頭）
従事者数	4人（うち女性2人。女性内訳：役員1人、一般職0人、常勤パート1人）		
女性活躍支援	[女性に配慮した取組み、実績のある制度・支援] 時間外労働及び深夜業の制限、家族経営協定締結 [女性に配慮して取組んだ環境整備] 施設設備関係（休憩室・野外トイレ）、重労働等の業務改善		

岐阜県加茂郡富加町



経営概況

生駒牧場は岐阜県富加町南部の集落に隣接した混住地域にある。常時100頭前後の牛を飼養しており、現在の内訳は乳牛65頭・育成牛15頭・繁殖和牛9頭・和牛子牛12頭など101頭となっている。

同牧場3代目である生駒一成氏の父の代は搾乳牛のみだったが、経営継承後は自分たちに合った経営を見つけないかという思いから経営全体を見直し、搾乳牛を減らして乳肉複合経営へと転換した。

富加町内では高齢化・担い手不足により休耕地が拡大していたため、近隣の休耕地を借り受けて草地とし、自給飼料への切り替えを進めることで現在の経営基盤を築いた。現在30%を自給しており、さらに増やす方向にある。



1995年にはさらなる経営安定を目指し、妻・薫氏を中心に受精卵を活用した和牛子牛生産に着手している。

現在育児中の次女が、いずれ牧場を継ぎたいという意思を示しており、2～3年後には夫婦と次女と従業員1人で経営していく予定。作業を効率化し、利益を上げられる経営を目標とし、第3者継承も視野に入れ、法人化を検討している。

1. 経営者の理念・意識改革

薫氏は名古屋の非農家出身。「酪農はやらなくていい」という条件で一成氏と結婚したが、義父から子牛の哺育を任され、楽しさとやりがいを感じるようになった。次いで義父から「経理をやってくれないか」と頼まれ、簿記専門学校に通学して日商簿記3級を取得。期待をかけられたことで農業参画への意識が高まった。

義父の死後、夫婦での経営を開始。労働力が1人減ることは体力的にも精神的にも負担が大きかったため、経営全体を見直すことになった。徹底的に話し合い、酪農専業からゆとりをもって経営できる乳肉複合経営へと転換することを決めた。規模拡大ではなく、1頭1頭の個体管理に力を入れ

ていく方針をとった結果、経営状況は良くなった。

薫氏は全国の女性農業者が参加する講座を受講し、自信に満ちた女性農業者との出会いに刺激を受け、「パワフルで誇り高い女性農業者になりたい」と考えるようになった。

1998年には地域で最初に家族経営協定を結ぶ。取り組んでいたことを文書化したことで、意識が変わったという。夫婦の役割分担が明確となり、それぞれが仕事への責任を持って作業に取り組むことにつながった。作業は完全な分業制で、明確に分かれている。一成氏は畜産部門の搾乳・地元に戻元する堆肥の管理・牧草生産、薫氏は育成・子牛の哺育・繁殖・経理を担当する。

「家族経営協定は現在の経営の原点。作ることで、必ず効果はある」と薫氏は評価する。

2. 女性が働きやすい環境の整備

家族経営協定を結び、就業条件を決めたことにより、余暇が確保できるようになった。余暇の活用法として団体の役職は受けるよう心がけ、現在、岐阜県女性農業アドバイザー・酪農教育ファーム理事などを務めている。

効率化にも力を注いでいる。2015年度の経産牛平均飼養頭数は63.3頭と平成20年度と比較して26.3頭増加したが、ヘルパー制度の導入や雇用によって労働力員数は3.1人（2,000時間換算）となり、2008年度の4人から減らすことができた。

3. 女性の活躍による経営改善

乳価が年々低下する状況下で、酪農以外に所得を求めて模索した結果、行き着いたのは和牛受精卵を利用した和牛子牛の生産である。薫氏は1998年から99年にかけて、家畜人工授精師・受精卵移植師の資格を取得して取り組み始めた。

人工授精師の資格取得に加え、2004年に乳用牛群検定を導入したことで、1頭あたりの受胎に要した種付け回数が2.3回と、以前に比べ飛躍的

に向上した。3回以上種付けする割合は年々減少しており、繁殖成績が改善されている。

「育てることは女性に向けた分野なので、酪農・畜産は女性に向いている」と薫氏は話す。酪農には関わらないはずだった薫さんが引き込まれたのが、義父から子牛の哺育を任されたことがきっかけだったことからもうかがえる。

4. 地域・社会への貢献

畜産は富加町の町の基幹産業だったが、現在は酪農2戸・肉用牛2戸・養豚1戸・養鶏2戸に減少した。町内の子供たちが畜産にふれる機会も少なくなっていたため、教育委員会と連携して富加小学校の3年生を対象とした3日間程度の酪農体験を、2003年から積極的に受け入れている。生きものとのふれあいを通じて、命と食の大切さについて伝えている。2008年度には酪農教育ファームの認証を受け、酪農の現場を理解してもらう努力をしている。

岐阜県農業大学校の先進農家派遣学習では毎年1週間から1カ月、畜産を専攻する学生を受け入れており、どの牧場でも通用する人材を育成することを心がけて取り組んでいる。

農協管内で酪農を目指す就農希望者を雇用し、担い手育成にも寄与している。

審査委員の声

バイタリティあふれる代表の妻・薫さん。代表の一成さんはとても穏やかな方。1998年に結んだ家族経営協定はいつもしていることを文書化しただけだが、公に発表することで意識が変わり現在の経営に結びついているという。牛を育てるのは女性が得意な分野。いずれ農場を継ぎたいという次女に「こういうふうになれるよ。頑張ってやるといいことあるよ。」と伝えたいとのこと。「継ぎたくない」「渡したくなる」農業経営体である。